＜日本イギリス哲学会　第７０回関西部会例会　報告要旨＞

報告１： エドマンド・バークの社会思想における階層秩序形成論

貫　龍太

J.G.A. Pocock の研究以来，エドマンド・バークの「作法 manners」概念に関心が集まった結果，バークの徳概念は社会ルールを意味する作法への順応と同一視されるような傾向がある。苅谷千尋は，バークの名誉概念に早くも着目した Abraham D. Kriegel の研究に依拠してこの解釈傾向に異論を唱え，バークにとって名誉とは，統治者が徳を発揮したことに対する公的報奨を意味すると解釈した。つまり，名誉とその配分は，統治者と被治者との間の垂直的な関係を前提とするというのである。

本報告は，政治思想史の観点から行われた苅谷の解釈を社会思想史の観点から継承することで，バーク思想において従来看過されてきたように思われる，階層秩序形成論の側面に光を当てたい。つまり統治者に限られず，選良が徳を発揮し，民衆がその徳を承認することで，社会における階層秩序が形成されるというバークの社会秩序観を抉り出すことが，本報告の目的である。

本報告は以下の構成を予定している。すなわち，第一に，バークが主著『フランス革命の省察』（1790）及びその補遺である『フランス国民議会議員への手紙』（1791）において行ったオリバー・クロムウェル論を考察することで，バークはクロムウェルを，野心を徳に転換する「尊厳 dignity」を示したことで内乱のイングランドに社会秩序をもたらし，内乱を終結させた人物として描いたことを明らかにする。第二に，クロムウェル論の分析を前提に，同じくバークの『省察』を中心に展開されている国教会体制論を分析することで，アングリカン信仰に基づく「完全性 perfection」への動機づけが，動的かつ発展的な階層的社会秩序の形成原理として位置づけられていることを明らかにする。第三に，バークの階層秩序形成論の存在を明らかにすることが，特にバークのフランス革命論全体の解釈をどのように進展させうるのかについて展望する。

（京都大学経済学研究科）

報告２：　　J. S. ミルの三度の南ヨーロッパ旅行

岡本　慎平

ジョン・スチュアート・ミルはその後半生において、ロンドン南東部ブラックヒースに構えた自宅と妻ハリエットの故地となる（そして自らもそこで没する）南フランス・アヴィニヨンの別宅を往復する生活をしていたことはよく知られている。しかし彼は時としてその英仏の往復から離れて、ヨーロッパ大陸の国々へと、その大半が徒歩による植物学のフィールドワークを兼ねた旅行に出かけていた。本発表では、その中でも特に大規模な三度の旅行を検討する。

一度目の大旅行は 1854 年の年末から 1855 年 7 月の半年にわたって実行したもので、彼はイタリアとギリシャを中心として漫遊している。この旅は、当時まだ存命だった妻ハリエットに宛てて道中で書かれた手紙で詳細に説明されているため、例えば、F.A.ハイエクはこれらの手紙を整理して、ミルがフィレンツェやローマなどのイタリアの古都、当時イギリスの保護領だったギリシャのイオニア諸島などを訪れ、各地での観察や発見をハリエットにつぶさに報告していることを明らかにしている。二度目の大旅行は 1860 年 4 月から 5 月にかけて、イベリア半島に向かった。この旅行の詳細は「スペインの植物(Botany in Spain)」と題された長大な紀行文にまとめられており、これはミルの植物学関連文献の中でも際立って重要なものである。三度目の大旅行は、1862 年の夏に養女ヘレンを伴って行われた。この旅はアヴィニヨンを出発して、アテネからイスタンブール（コンスタンティノープル）に向かい、オーストリアとスイスを経由してフランスに戻るという、ミルの旅行のなかでおそらく最も長距離を移動したものである。この旅行についての記録は少ないものの、ミルの発見した数少ない新種植物の一つ（Sedum millii Baker）はこの旅行中に現在のトルコで採取されたものである。

本発表では、以上三つの大旅行について、可能な限り正確な旅程を割り出し、ミルがこれらの旅から何を獲得したのかを、特に植物学との関連において明らかにする。ミルの旅行は単なる物見遊山ではなく、植物学のフィールドワークを通じて自然の理解を深める貴重な機会であり、その成果は彼の思索に大きく寄与している。

（人間社会科学研究科助教（広島大学））